

青い帽子の物語

土屋隆夫



角川文庫 4235

あお ぼう し ものがたり
青い帽子の物語

つち や たか お
土屋隆夫



角川文庫 4235

昭和五十三年十二月十五日 初版発行
昭和五十五年一月三十日 三版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-140614-0946(c)

青い帽子の物語

土屋隆夫

目次

「罪ふかき死」の構図

五

青い帽子の物語

六

死者は訴えない

六

情事の背景

二七

寒い夫婦

二八

死の接点

二八

淫^{みだ}らな骨

二四〇

解説

山村正夫 二七

「罪ふかき死」の構図

—

戦後、美術評論家として、又美術雑誌「パレット」の主宰者として精力的な活動が続けている相原俊雄は、朝食後のコーヒーをベランダに持出して、ゆっくりと楽しんでいた。

明方近くまで降りつづいた雨がきれいに上って、爽やかな大気が、シットリと木立の緑を含んで流れてくる。

午前八時……。

「さて——」

と呟いて煙草に火をつけた。今日の計画は素晴らしい。まるで二十歳の若者のように心がときめくのだ。半生の記憶に残る「女体遍歴」の中でも、これは確かに快心の一頁を記録する価値がある——。

淡い紫の煙が、ゆるやかに消えてゆくのは、ずんだ相原の口笛が追い駆ける。——おおスザン

ナ。

わたしやアラバマから

バンジョーひいて

はるかルジアナに

あの子に会いに

おおスザンナ おお泣くじやない……

三十六歳の相原が、心のバンジョーをかき鳴らして、会いに行くスザンナは斎木悦子。彼女も又、あの宏壮な邸宅の一室で、もう、朝の化粧をすませた後、やがて訪れてくる楽しい期待に、ふくよかな胸を押えて、彼の名を呼びつつづけているであらうか——。おおスザンナ……

「さて——」

もう一度呟いて立上る。今朝のネクタイは緑色がふさわしい。それから麻のハンケチ。彼女が贈ってくれた銀のシガレットケース。

一つ一つを身につけながら、相原の奔放な空想が、悦子の肉体を荒々しく愛撫する。

「あの……お客様で御座いますか——」

女中が小型の名刺を持って現われた。急に不愉快な表情でそれを取上げる。湯本智子。その脇に小さく「亡くなった伯父の事でお目にかかりとう御座います」と記してある。

湯本智子——。名刺をクルッと掌の中でまわめて腕時計を見る。午前八時半。あと一時間半あ

る。

「三十分ぐらいならと言って……ここへ来て頂こう」もう一度椅子に腰を下ろした。好ましくない訪問客である。

この女は、悲劇の家から抜け出して来た女なのだ——

この名刺に記してある「亡くなった伯父」——つまり泉弘人は、彼の友人であり、特異な画風で将来を囑目されていた画家である。

智子は戦災で母と弟とを失った。そして母方の伯父である泉家に現在寄寓しているのである。もっとも、夫婦二人きりの寂しい生活を送っていた泉家が、むしろ望んで彼女を家に迎えたという方が本当であろう。相原も数回食事を共にした事がある。明るい感じの娘であった。だが、この女の行く所には、いつも悲劇がつきまとっている……。

泉弘人は、つい三月ほど前、最愛の妻道江に先立たれた。しかも、夫人の死は自殺であった。自宅の一室で劇薬をのんだのである。一片の遺書もなかった。しかしただ一言、苦悶の中から夫人へ、つぎのような言葉を残している。

——わたしの自殺は、罪ふかい死で御座います——

原因は全く不明であった。いや、不明というのは当たらない。夫人は、はっきりと自殺の原因を語っているではないか。「わたしの自殺は罪ふかい死で御座います」と——。

だが、その「罪」とは何であろうか。なんの心当りも考えられなかった。しかもそれから二月

ほどたって、正確に言えば今から八日前、夫の弘人も亦、夫人の後を追って自殺したのである！その自殺が、いかに不思議なものであったかは、当時各新聞社が、かなりなスペースをこの記事に与えたのもうなずける。まことに、泉弘人の奇怪な自殺の模様と言え——いや、その事は、今、読者の前に現われるこの湯本智子と呼ぶ女性が、詳細に物語る筈である。

二

「お出掛けの所をお邪魔いたしましたして……」

「いや、さ、どうぞ……」

「その節はいろいろと御迷惑をお掛け致しました」

「あなたも大変だったですねえ。なにしろ道江さんの事があってから、二月とたたない間に、又あんな事になったんですから……」

「はい——。母と弟には、一瞬の間に別れました。そして今度は伯母と伯父を……本当に私、もう自分の力で自分を支えて行くのがやっとの思いで御座います」

「そうでしょうねえ、よくあの家にお一人で暮らして居られると感心しますよ」

「なんです私、いまだにアトリエに行つて伯父さん、などと呼んでからハッとすることが御座います。本当にこの頃、ひとり言などという癖がついてしまひまして……」

——いけない、この女にも亦、不吉の陰がつきまといっている。純白なツーピースの、胸につけ

られた緑の飾りボタンを眺めて、相原は漠然とした不安を感じる。この女がこの次の自殺者だろうか——。

だが、そうした疑問を、すぐ反撥させるのは、女の澄んだ瞳である。静かな落着きの中に深い叡智を湛えているような瞳……広い額と、小さいがひき緊った唇、言葉とは反対に強い意志の力がこの女の全身に流れているのではあるまいか。婦人雑誌の「身の上相談」型の女とは、まるで違った感じなのだ。美しいがもろくはない。シャンと立上っているものの美しさである。そうすると一体、この女は——

「それにつきまして、是非先生にお聞き願いたい事が御座います……いいえ、このお話を理解して頂けますのは、先生より外にもうないので御座います」

「なにか、泉君の遺産その他に関してでしょうか。たしか泉君も、遺書や遺言は残さなかったと伺って居りますが……」

瞬間、智子の瞳に、或る種の感情がひらめき、過ぎた。

「いいえ、私のお話申上げたい事は、伯母の自殺の真相……そしてそれにつながる伯父の死について、もう一度考えてみたいということで御座います。先生、伯父は本当に自殺したので御座いますしょうか……!」

「と申しますと——」

「伯父の死は、『偽装された自殺』ではなかったか、という事で御座います。はっきり申しま

すれば、伯父は誰かの手によって殺害されたのではないかという疑問で御座います」

「まア待って下さい、智子さん、あなたは今大変重要なことをお話になっていらっしゃる。ふむ、そうするとあなたは、泉君の死は他殺だと断定されるわけですね。常識的には、誰も自殺だと考えた。画業上の行詰り、そして失礼ながら財政的な困窮、加えるに愛妻の自殺……芸術家の鋭い神経が、堪え得られなくなったとき、泉弘人は死を選んだ——これが当時の見方でしたね。あれから一週間たった今も、私にはそうとしか思えないのだが……」

この女は一体、何を考えているのだろうか。二つの不幸な死が、何かの幻想を彼女にもたらしたに過ぎないのだ——と、相原の目が智子の澄んだ瞳をさぐるようにジッと見た。

「はい……でもこの疑問は、私が伯父の死体を一目見たとき、すぐ浮んで参ったことで御座います。口に出して、ハッキリそれと指すことの出来ない……しかし不思議にも自殺ではない、と強く否定したいあの奇怪な死のポーズが、毎夜私の心を苦しめました。この一週間……私は私だけの推理を、一つずつ重ねて参りました。そして昨晚、とうとう私は動かすことの出来ない結論として伯父は殺害されたのだ、という確信を持ったので御座います」

顔にも言葉にも何んの表情もなかった。それでいて不思議に迫ってくるものを感じさせるのである。

相原は時計を見た。午前八時五十分。斎木悦子の豊麗な顔が目に浮ぶ。はうれいだが、まだ立上ってしまふのは惜しい気がする。この娘の、推理小説じみた考え方や、そして犯人と目されるものの名

前も、ちょっと聞いてみたい気がするのだ。あと二十分だけ。

相原は新しい煙草に火をつけて、目で智子に次の言葉を促した。

「完全犯罪などということは、推理小説家の夢にしか過ぎないので御座いましょうか。緻密な頭脳と長い間の計画とに依って、或る一人の人間を、何んの証拠も残さずに、地上から完全に抹殺してしまうことが、果して出来るので御座いましょうか。いいえ、犯人が緻密な、巧妙な手段で事を行うほど、却って消し難い証拠を残すという事も又考えられるので御座います。人間の智慧も、所詮は一つの限界を持って居ります。それはむしろ、全能の神が、我々に与えられた慈悲でも御座いましょう。伯父を殺害した犯人も、この限りある智慧を信ぜぬ者で御座いました。神の慈悲に対する叛逆者だったのです」

「で……お話中ですが、あなたはその犯人を、つまり神への叛逆者を指摘出来るとおっしゃるのですね」

「はい」

「それは一体、誰なんです」

「はい……その為には、伯父の遺作となりました、あの『罪ふかき死』と題する絵の秘密を解かねばなりません。そして、もう一度、あのアトリエの『情景』を、はっきりと思い出して見る必要があると存じます」

新しくはこばれたコーヒーが、もう冷たくなっている。二人とも、それを取上げようとしな

った。午前九時。今度は智子がチラッと小型の腕時計を見た。

「丁度あの晩、私は演奏会を聞きに出掛けて居りましたが、いつもとは違って、音楽の中へ浸りきって行けないのです。そして、虫が知らせたと申すのでしょうか、途中で帰って参ったので御座います……」

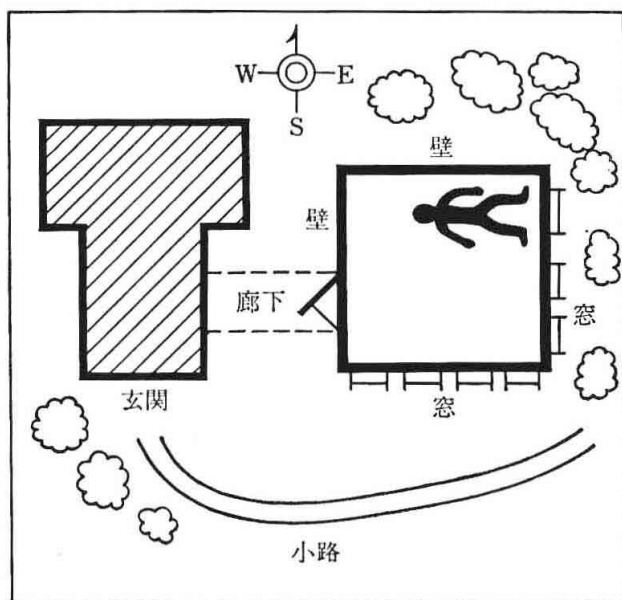
三

泉弘人の死を最初に発見したのは智子であった。

演奏会を途中で抜け出し、帰宅したのが十時半頃であった。星の降るような美しい晩であったが、泉家の門前へ辿りついたとき、黒々と静まり返っている家全体に、何かギョツとするような不安と、ただならぬ胸さわぎを覚えたと後で彼女は語っている。

お茶を入れて伯父の居間に持っていったが姿はない。そこで彼女は、母屋から廊下づたいに、別棟になっているアトリエに行つて伯父を呼んだ。

このアトリエは、東と南が、ガラスをはめ込んだ扉で、南側の扉は小砂利を敷きつめた細い小路に面している。扉は両方とも四枚ずつ、一枚の扉に六枚ずつの大型ガラスが、チーク材の枠でシッカリとネジ止めされ外側には白ペンキが塗つてある。扉を開けば、南側の小路からも、東側の雑草だらけの庭からも、自由に出入り出来るのである。勿論、夜分は内側からさし込みの鍵をかけることになっている。



北側は壁で、つまり母屋からこのアトリエに出入する為には、廊下づたいに来て、西側のドアを開くのが普通である。

智子はそのドアの前に立って伯父を呼んだ。返事はない。電燈を消して、ソファーにもたれたまま、よく考え事をしている伯父なので、あかりの消えている事には疑問を持たなかった。

力いっぱいドアを引いてみる。開かないのだ。中から錠が下ろされている。乱暴にノックした。答えはない。不吉な予感が智子の胸をドキドキさせた。しかし恐ろしさは感じなかった。何かが起ったのだ——それを確めたい気持が、彼女を事務的に動かした。

母屋へ引き返して、小さな薪割りと懐中電燈を持って来た。力まかせにドアを叩いてみる。二打ち、三打ち、メリメリとドアの

一部分が破れて、ポツカリ穴が開いた。

ボーッと、うす明りのする室内の一部が、闇に馴れた彼女の目にうつる。そこに懐中電燈の光をサッと投げかけた。その時の恐怖を、彼女はこんなふうに後で語っている。

——はじめ、伯父がふざけているのだと思いました。懐中電燈の光の環の中に、両手をグッとつき出して伯父が寝ころんでいるのです。北側の壁の前に、頭をこちらむけにして。伯父さん——と声をかけました。返事はありません。多分二、三十秒の間、私はその姿とニラメッコするうちに立ちすくんでいました。だが、その不自然な体つきから、私はすぐ伯父の死を直感致しました。ドキッとなって、懐中電燈を持つ手がふるえました。動かされたその光が、壁の一部分をうつし出したとき、私はアッと叫びました。壁の上に、あの「罪ふかき死」に描かれた、背景用の幕が垂らされているのです。もしかすると……私はこわごわその光を伯父の頭部の方へ動かして行きました。やっぱりありました。あの不吉な画と同じように、伯父のさし伸した両手の先に夏蜜柑が二個、チャンと置かれていたのです。ああ、これは全くあの呪わしい画と同じ構図ではないか——そう思ったとき、思わず懐中電燈を取り落して、私は一散に母屋の方へ走り出したのです——

さて彼女が自ら、呪わしい画と呼ぶ、この「罪ふかき死」は泉弘人の絶筆となった作品であるが、若干の説明をする必要がある。

これは泉が、妻の自殺後一か月ほどたった頃「衝動的な興奮」に駆られて描いたものと言われている。

その絵は奇妙な構図であった。背景は、緑と赤の、ドギツイ縞模様で一面に塗りつぶされている。それは、緑と赤の色を交互に使って、筆太に画かれた「く」の字に近い線が横に並んでいるだけのものだが、これはよほど彼の趣味になつたものか、他にも一、二枚静物を描く際に、この布が背景として使用されている。上部が、下部よりもやや線が太い。

（私はこの模様や布に、ややこだわりすぎたようだが、この事が重要な意味を持っていることは、後で述べる通りである）

そしてその「く」の字の、曲った辺を中心に、一人の裸婦が両手を前方にさし伸して、画面一杯に横たわっている。伸ばされた手の前方には、夏蜜柑が二個置かれているのである。裸婦の瞳はとじられ、唇だけが、せつない喘ぎを続けているように開かれている。画面はそれだけなのだ。だが、この画に、陰惨な感じを与えているものは、裸婦の色彩であった。それは全部がうす暗い灰色を持って描かれてあつた。その髪も、唇も、とじられた目も。

だから、ヒョッとこの画を見ると、強烈な色彩の模様の中に、一個のデクの坊が横たわっているような錯覚を感じるのだ。そして仔細に見て行くなれば、その灰色の裸婦の表情に、言いしれぬ悲哀と鬼気が漂っているのを感じ、その手の先に置かれた二個の黄色い夏蜜柑が、深い謎のような静寂さをもって、ポツンと目に映ってくるのである。